

ある休日、病院で定期診察を済ませた私は、午後の時間を穏やかに過ごしていた。ベーカリーで昼食を食べ、書籍やCDを扱う複合店で漫画などを物色、スーパーで日用品を買ったあと、友人宅へ向かった。友人宅の大きな鏡に目をやると、そこにはTシャツを前後逆に着た私があった。

一瞬、うろたえたが軍人はいつも冷静でなくてはいけない。私は軍人じゃないけど。

家を出たときからか、検診中に逆転したかは分からないが、どのみち町中を歩き回ったあとだ。前向きに考えるんだ。無理やりリバーシブル状態(?)じゃないか。ふと、自分の失敗の数々を振り返る。

幼いころ、自転車ごと肥溜めに落ちて、家の外でホースの水で全身を洗われた。中学生の時、友人と

ファスナー全開だったと気付いたのが27歳の冬。そして中学時代のジャガイモ畑の悪夢がよみがえっ

たのが、おととし(46歳)の秋だ。川の泥に膝上まで埋まった。クレーンで引き揚げを頼もうかと思った。泥の圧力ハンパねえ。私の家族も私に負けず劣らずだ。母は歯磨き粉と間違えてムヒで歯を磨き、きな粉牛乳と称して私に鯉節入りの牛乳を飲ませた。激マズだった。私の車と間違えて、無施錠の他人の車に乗っていたこともある。祖母はお菓子と間違えてシェパードのご飯を

# D N A

一皿たいらげ、犬のシャンプーで頭を洗っていた。叔父は、団地4階の自宅と間違え、これまた無施錠の3階の他人の部屋に上がり込んだ。玄関で靴を脱ぐ前に気付いてほしいところだ。



## 馬場 雅子



わが家はドジな家系であった。これは遺伝だ。私だけが特別、間抜けなわけではない。そう言い訳しながら、雅子は、ひたすら自分を励ますのであった。(プランテムタナカ 製缶グループ主任)